
此ノ樹の110メートル ～エデムとORTが行く平行世界シリーズ 第1弾～

注ぎグチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

此ノ樹の110メートル　＼エデムとORTが行く平行世界シリーズ　第1弾＼

【Nコード】

N4884V

【作者名】

注ぎグチ

【あらすじ】

「エデムとORTが行く平行世界シリーズ」第1弾。

ある日、主人公はパチンコ屋に行くが・・・当たらない！まったく当たらない！！隣のおっちゃんに励まされながら迎えた3737回転目の綾波背景リーチ・・・暴走か！？と思われたそのとき・・・主人公は知らない空間にいた・・・この物語は平穩を願う？オリ主がチート？を駆使して様々な世界を冒険するお話です。いろんな原作世界に行く予定です。

基本、この作品はTYPE・MOONの世界観を元にそれぞれの原作に介入していくものです。処女作で至らない点もありますが、よろしく願います。

シリーズものでネギまとかリリカルなのはとか東方とかいけたらいいなと思っています。現在、シリーズ第2弾「Rewrite編」も書いております。

「鋼の大地」の設定

参照推薦（前書き）

鋼の大地のもとの設定です。元か未完成の作品なので少し大変です。

これは本編を楽しむ上で知っておくところいろいろ都合のいいものです。多少のネタバレもあります。

「鋼の大地」の設定

参照推薦

・アド・エデム

Ado Edem.

騎士エデム。魔剣・斬撃皇帝を持つ。

亜麗百種との戦いでは目立たない騎士だったが、アリストテレス飛来を期に表舞台に台頭。斬撃皇帝で黒いアリストテレス（タイプ・ジューピター）を一撃のもとに両断した。以後はあまりに逸脱した魔剣のため、亜麗百種、人間、騎士たちによって大断層に作られた廃棄場『魔女の大傘』に幽閉された。

アリストテレスとの戦いが終わりに近づく頃、人間サイドの切り札として投入されて難攻不落といわれた十字架を消滅させるも、以降の生死は不明。
タイプ・サターン

・アトラシア

封印区アトラシア。ゴドーがブラックバレルを発掘した場所。

・アリストテレス「ONE」「Ultimate ONE」

大戦末期に現れた八体の生命種。正体不明の存在。それぞれの形態は著しく異なり、その生態も相容れない。他天体から飛来したもので、それぞれの天体の系統樹の唯一最強の生命体。転じてその天体そのものでもある。それぞれが一体のみで現存するこの世界の生命種を絶滅させることが可能。

アリストテレスという名称はヒト人がつけたものだが由来は不明、旧時代の学者にその発端がみられる。そもそも彼らには名前の概念すらない。アリストテレス同士で争うことだけがなく、それ以外は自由に活動している。中にはこの星の生命種から知識の概念を学び、人類と接触するアリストテレスも数体現れる。

人類と亜麗を敵視し、無差別に攻撃を繰り返した。これにより人類はその基盤を完全に破壊され、亜麗百種もその数を激減する。大戦終了後、空を覆った雲海によって活動は停滞するも、現在も無差別に惑星上の生命種を消去している。これ以後、人間種と亜麗は不可侵の交友となり、アリストテレスという共通の敵を排除するまで自らを人類と大きく区切る。

それぞれの故郷である惑星からの勅令を受信し、伝えるタイプ・サターン（十字架）が消滅したのち、人類と最終戦闘に入る。

なお死徒二十七祖の五位であるORTは水星（？）のアルティミット・ワンであるが、地球が発信したSOSサインを受け取る最強種ではない。また五千年ほど早く地球に到達した。そこから計算すると、Notesの時代は西暦五千年前後ということになる。

・亜麗百種「a-ray」

星の資源を使いきった人類が生み出した次世代の霊長類。

かつての星に現存していた各生物種をモチーフにしたもの。荒廃した星でも生存可能であるように生態を大きく改良・強化されたもの。その系統樹は様々で、大きく分類して百種にわたる。一から十までの位である亜麗は単一種であり、群体ではない。

中には人間としての遺伝子を含み、人間と似た形態の亜麗も存在するが、やはり大部分は様々な生命種と霊長類とが融合、進化したものである。

・ウエストランド

西の大陸。騎士アド・エデムが黒いアリストテレスを両断した際に暴走した、黒いアリストテレスの擬似太陽によって焼き尽くされた大陸。ゴドーの出身地である人工楽園もここにあった。

・ORT「type:mercury」

オルト。死徒二十七祖の五位。水星（？）のアルティミット・ワンであるが、5000年ほど先に地球に到着してしまった。なお地球が発信したSOSサインを受信する最強種ではない。

全長40メートルほどの宇宙生物。外見は巨大な蜘蛛に酷似する。西暦以前に南米に落下した突然変異種らしい。攻性生物として次元違いの能力を誇る。無謀にも捕獲に来た前五位の祖を秒殺、後に吸血能力を持つことが判明し、祖として扱われる。単純に実力でいえば現在世界最強。地球で戦う限り弱点は無いとされる。死の概念がないため直死の魔眼でも殺すことはできず、物理的に破壊するしかない。

地上のいかなる材質よりも硬く、柔らかく、気温差に耐え、鋭いという外皮に覆われている。

侵食固有結界（固有結界に似た能力）『水晶渓谷』を数千年にわたり展開しているという。水晶渓谷は彼が存在するだけでそこを彼の住んでいた環境に変化させるというものであり、要するに異界秩序による地球の物理法則の改竄である。

・騎士「Ether Liner」

荒廃した地上でも生きていけるように適応・進化した新人類である人間種の中でも、より人型の生き物として進化したもの。人間種の中でも激変した環境の影響をより強く受諾した生命種。

誕生時から体外にもう一つの器官（魔剣と呼ばれる特殊兵器）を持ち、いずれこれをジンによって物質化するに至る。旧時代の兵器の助力なしで亜麗と対等に競いあえる攻性種。実戦に用いられるほど強力な魔剣を持つ者のこと。

現在は七十八人が登録されている。

・黒いアリストテレス「type:jupiter」

大陸の西に出現したアリストテレス。

全長数十キロメートルに及ぶ黒一色の巨人で、フォームは人間に極めて近かった。正体は黒色の光子ガスの集合体で、理論上その大きさは無限大にまで膨張する。ガスの中心に擬似太陽としか説明できない正体不明の核を持ち、体である光子ガスはその物体から放出されていたようだ。

八体のアリストテレスの中で最も生命を消去した。西の大陸に総力戦を挑まれ、これを無傷で（といっても傷という概念がないのだろうが）撃退する。その後西の大陸に派遣された騎士団との戦闘の末、騎士アド・エデムの魔剣・斬撃皇帝によって両断される。断ち切られた擬似太陽は暴走し、西の大陸の地表をすべて灼き尽くした。

・ゴドー

Godō.

本名消去。天の亡骸を撃墜し、銃神、偽神、神もどきという通り名で呼ばれる。荒廃した世界に残った数少ない旧時代の人間。終末の中でも生き延びようとした人間たちによるウエストランドの人工楽園の出身。環境適応処置を受けていたため生き残った唯一の人間。最弱ではあるが、最強の毒に耐えうる狙撃手。死亡時には十九歳ないし二十歳。

鋼の大地の環境は人間である彼にとって月に住んでいるようなもの。機械と薬の助けなしには満足に呼吸もできず、食料は毒でしかないのだが、幾度もの終末を乗り越えてしまったためか自虐的ではあるが悲観的にはならないといった達観（諦観）に至っており、日々のんびりと過ごしている。

かつては十二、三歳の頃に家族を殺された復讐心から封印区アトラシアよりブラックバレルを発掘し、射撃の腕を磨いた。タイプ・ヴィーナス降下阻止作戦に参加した後は戦いを避けて行方をくらました。世界樹の街では天使狩りを生業にしており、少女が現れてからはノルマを一日二十体から三十体に増やした。なお稼ぎはあまりよくなかった。

五年前の鳥墮しを覚えていた軍部の者によってタイプ・サターン（十字架）迎撃戦に登録され、同作戦において死去。

・斬撃皇帝

アド・エデムの持つ魔剣。星を食うもの。

対象の大きさに合わせて刀身を増大させるだけの単純な魔剣。魔剣構成前は種子（剣種）状態で待機し、エデム開眼に呼応して芽吹

き、大地に突き刺さり拡大・増築を思考の速度で行ってゆく。剣種は掌にすっぱり収まる程度の大きさで、それを握った手と同化するように成長する。なお剣種は土中では不活性。

活性状態では手と同化した部分の上下に黒い刀身が現れる。刀身の幅と厚み、および上下の刀身の長さはともに8対2の比率である。しかしいくらジン（真エーテル）を利用した魔剣といえど、これだけの巨大質量を構成するには莫大な変換源が必要となる。そのため、斬撃皇帝は増大すれば増大するほど同時に大地を削り取ってしまう。

資源を得るために大地を流土させていった旧世界の方法となんら変わらない斬撃皇帝は、『人間を守る為に世界を滅ぼす』という人間種の在り方の具現といえる。

通常戦闘状態において刀身の周りに見える青いオーラのようなものは、刀身の放つジンではなく刀身によって裂かれた空。タイプ・ブルートーの血液である赤い空を切り裂き、真実の空を垣間見せる斬撃皇帝の威容である。

・十字架「type:saturn」

全長三千メートルに及ぶ十字架のようなアリストテレス。その外皮は発光する鉱物で形成されており、模様は一切ない。

空中要塞とも呼ばれ、惑星圏内にいるアリストテレスたちのリーダー格であるらしく、それぞれのアリストテレスの故郷である惑星からの勅令を受信して伝える役割を担う。

十字架に似たこの飛行物体は、その体から地上に向けて光の雨を降らしていく。雨は一メートルほどの十字型の電磁衝撃で、地上に着弾すると同時に爆散、周囲の生命体を消滅させる。十字型の光には他に種類があり、そのまま地表に穿孔して地震を誘発させ、生命

が住む大地そのものを破壊する。地表に突き刺さる無数の十字架は、
荒れ野に広がる墓標そのものだろう。

これの迎撃戦においてゴドーが死去した。

騎士アド・エデムによって消滅し、その後アリストテレスは人類
との最終戦闘に入った。

・銃神「GODO」

ゴドーのこと。偽神、神もどきとも。

・少女

投影。天使の幻想。

ある日突然ゴドーのアパートメントに現れ、お手伝いと称して居
候する少女。長い金髪と白いワンピース、幼さを残した顔に頭の上
には光の輪が浮いているという、まさに天使という容貌をしている
が、亜麗百種の中の天使ではなく、天の亡骸（type：venus）の捕食端末。通称アリスちゃん。

ギターを弾くが、チューニングすら知らなかった上に下手。基本
的に、いるだけで何もしない。特殊能力は微妙な癒し効果。得意技
はゴドーの給料を食いつぶすこと。趣味は大樹の下に集まった人々
の人生鑑賞。

・ジン「grain “Ether”」

宇宙塵。第五架空要素。真エーテル。惑星としての機能をなくした星にあふれたいたあらゆる有害、計測不能の粒子の総称。人体に有害であるが、ごくまれに人体に特異な変化をもたらすことからエーテルとも呼ばれる。

亜麗百種、人間種、騎士、ともにこのジンによって生み出された新種にすぎない。大気中に分散するジンのエネルギー変換効率は凄まじく、結果としてかつての惑星上ではありえなかった戦闘理論が打ち出された。

ジンを体内に取り込める亜麗、ジンを結晶化させた魔剣との戦闘において、旧時代の兵器は全てが無価値なものとなってしまった。

・人工楽園

ウエストランドにあったゴドーの出身地。生き延びようとした人間によって作り上げられ、黒いアリストテレスによって消滅した。

・世界樹

死んだタイプ・ヴィーナス（天の亡骸）の翼。世界樹の街の空を覆い、雲海まで届く巨大な二本の大樹。翼の羽は本来の姿に近い天使のイメージをかたどってカタチを得た。

・世界樹の街

タイプ・ヴィーナス（天の亡骸）の死骸を監視する為に作られた基地。設立当時はここに配属される者は島流し同然であったが、天の亡骸が地上を緑化させていることが判明し、徐々に街として成長していった。実際は天の亡骸が緑化していたのではなく、天の亡骸の上に緑（といってもねずみ色の木々と枯葉色の草原だが）が芽生えていたのだ。

タイプ・ウラヌス、タイプ・ネプチューン射出作戦において大樹の葉はその大部分を失う。

・空が、赤い「blood sky」

この世界の空のこと。灰色の雲海を越えた上には青ではなく赤い空が広がっている。大気汚染のためではなく、大戦末期に飛来したタイプ・プルトーの血液のためである。

タイプ・プルトーを侵入させまいと対決した六人姉妹と相討ちになり、その血液はこの惑星を覆ってしまった。空を包む灰色の雲は六人姉妹が張った防御膜と思われる。この赤い空の中、侵入を阻まれた残る二体のアリストテレスは海を泳ぐ魚のように浮遊しているという。

・空が、昏い「cloud sky」

雲に覆われた空。何十と重なった雲層は、大戦以後、空というものを隠している。空が灰色なのではなく、空が見えないということ。灰色の雲はタイプ・プルトーと相討ちになった六人姉妹が張った

防御膜と思われる。

・第五架空要素

↓ジン

・第五真説要素

ジンに相克し、自壊させる鉱物。ブラックバレルの構成材質。

・大戦「Babel's Tale」

星の臨終後、生き延びた人類と亜麗百種の間起きた戦争。生き残りをかけた人類と、世界の覇権をかけた亜麗との争い。

群体ではなかった亜麗を統一した六人姉妹の前に人類は敗北寸前までおいこまれた。大戦末期、人類側は人間種と騎士を生み出し、戦いは死した星をさらに死滅させる大戦へと発展する。

大戦の勝者はいない。両勢力の戦いは、突如飛来したアリストテレスによってどちらも壊滅寸前に追い込まれる事で幕をおろし、不可侵の交友を結んだ。アリストテレスという共通の敵を排除するまで自らを人類と大きく区切っている。

・大断層

亜麗百種の盟主である六人姉妹の末妹『審判』が作り上げた、世界を二分する大地の亀裂。六人姉妹も作りたくて作ったわけではなく、騎士たちによって殺された末妹の断末魔がそのまま星を抉ってしまったに過ぎない。

この中に魔女の大傘が建てられている。

・タイプ・ヴィーナス

↓天の亡骸

・タイプ・サターン

↓十字架

・タイプ・ジュピター

↓黒いアリストテレス

・天使「No・20 Guardian Angel」

亜麗百種における人工の天使。百種中二十位だが、物質を破壊するという面においてのみ十位内種に肉薄し、魔剣を持つ騎士と同格とされる。つまり単体で核ミサイル並みの破壊活動ができる。

単一種の亜麗を守護する群体。旧世界における最大宗教の天使をオリジナルにもつ。二枚の鳥類の翼を持つ人間種。体のつくりはヒト型の女性体。世界崩壊後、大気中に散乱した重粒子を体内に吸収し、それを動力源として活動する攻性種。

なおその翼は空を飛ぶためのものではなく、周囲の重粒子を収束させる受け皿であり、翼がなくなるとも飛行する。外見的な美を重視する。

無論ほかのヒトと同じく高度な知性を持つ。しかし世界樹の街を襲うそれは別物であって知性はなく、ヒトを襲うが危険性は野犬程度で実害はほとんどない。

・天の亡骸「type:venus」

全長千メートルと推定された金星のアリストテレス。その姿を確認した者はなく、形態は定かではないとヒト人は言っている。

二枚の翼らしきモノを生やしたことなくヒトに近いフォルムをした生命体で、他のアリストテレスに比べるとこの星の生命系統樹に近い。

他のアリストテレスの侵攻にやや遅れて大戦以後に出現し、長く雲海の中を漂っていた。しばらくは無害であったが、理想的な苗床の探査・選定を終了して降下を開始する。記録では新暦八十三年に騎士団たちによる壊滅作戦によって撃墜、大陸のいずこかに落下したとのこと。本来はその惑星の地表に落下し、大地に根を張って自分の分身となる何億もの胞子（天使型の捕食端末）を撒き散らして惑星中を食い尽くす侵略型環境育成林床植物。生きたまま地表に下

ろした時点で現生態系の終焉を意味する。

死亡して後の世界樹の街に墜落し、その地盤となる。その際に肉体は死亡したが、意志らしきもの（本来それに意志という概念はなかった）は生き延び、その羽が本来の形態に最も近いイメージである天使をかたどってカタチを持った。これにより絶対に意思疎通ができないはずだったヒトと同じ思考回路を得た。

寄生型であったため、人間種概念をも摂取してしまった。

・鳥墮し

タイプ・ヴァーナス

天の亡骸撃墜のこと。世界樹の街のタイプ・サターン迎撃戦の五年前に行われた。この際にゴドーに『銃神』という俗称がつけられた。

・西の大陸

↓ウエストランド

・人間「Last-Seed」

品種改良を受けていない人間種。もしくは、その末裔。すでにこの惑星上では生存不可能な為、絶滅寸前といわれている。希少種であるが、希少価値はない。

生物としては強力だったが生命としては弱かったため世界終革に

よって大部分が死滅し、残った者たちも大気に満ちたジンに対応できずに死に絶えていった。人間たちはそんな中でも生き延びようとして人工楽園を作り上げるが、黒いアリストテレスにより速やかに消滅した。

鋼の大地において人間が生きていくことは月に住んでいるようなもの。人間が外界で生存していくためには薬物や機械によるサポートが必要で、空気も素のままでは吸引すれば死に至り、工場で作られる食物は身体能力を向上させすぎ、逆に毒となってしまう。

環境適応処置を受けていたゴドーは生き残った最後の人間である。

・人間種「Liner」

鋼の大地における人類。かつての人間種が、そのままの姿でこの世界に対応できるように進化したもの。正確には彼らも亜麗に含まれる。現在の環境に対応して生活ができるが、やはり人間としての機能を上回る能力はない。

かつての文明社会を再生しようと国家を形成している。アリストテレスの襲来以降は亜麗百種とは不可侵状態。

・鋼の大地「over count 1999」

臨終した星。死に絶えた惑星。生物の住めない世界。現在の世界の名称。正式名称ではなく、荒廃した大地に生きるヒトの間に伝わった俗称。魔術は失われている。

鋼の大地の記名が示すとおり、現在の大陸の大部分はひび割れた荒野であり、灰色と白濁とした雲に覆われている。食物は育つこと

はなく、大気はかつてのように動物に適した物ではなくなっている。人間種ふうに言うのなら、徹底した世紀末。けれど母体である星が死亡しても、人間種はその発達した文明技術によって生き長らえた。かつて人々が思い描いた星の終わりでさえ、人間種を滅亡させる事はできなかった。

星にとってそこに発生した生命種によって滅び去るのもまた『いいこと』であるが、それは自らを滅ぼした種も道連れとすることで赦すのである。自らが死んでも生きながらえた人間種に恐怖した星は最期に他天体に『いまだ存命する生命種を絶滅させてほしい』と助けを呼んだ。その結果飛来したのがアリストテレス。

・ブラックバレル「Longinus」

ゴドーが封印区アトラシアで発掘し、所有する黒い銃。六人姉妹には天寿の概念武装と呼ばれる。第五架空要素Ⅱジンを自壊させる第五真説要素によって作られた兵器であり、ジンを微量でも含む生命体にとっては天敵ともいえる。

この銃によって放たれた弾丸は、真エーテル（ジン）によって活動するモノならばいかなる能力値をも無視して傷を与える魔の一撃となる。神殺しの銃であり、攻撃対象になる生命種が強大な力、つまりジンを含むほどにその殺傷能力は飛躍してゆく。直接肉体に打ち込まれる癌細胞のようなものか。

世界に存在するすべての生命種はジンの影響を受けているため触れることすらかなわないが、人間であるゴドーは使いこなすことができる。人間がジンという新しいエネルギーに拒絶されたという欠点を逆転させた兵器。

汎用性が高く、各種オプシオンを換装することで狙撃銃としても使用可能。基本は曲銃床を用いるライフル型。

発掘時にはオリジナルとレプリカの二挺があり、ゴドーが愛用していたのはオリジナルの方。

・魔剣「Knight arms」

騎士が持つ武器の総称。

この世界に生まれた人間種は、すべからくジンの影響を受ける。生誕の際にジンを多く体内に含んで誕生した赤子は体外にもう一つの器官を持ち、それを自らの骨子として育て上げ、成人の際に外界にジンによって物質化する。この、いまだ未解析のジンで形成された兵器は様々な現象を誘発し、その影響は十分に兵器とよべるレベールをもっている。

魔剣をカタチにできる人間は数少なく、中でも実戦に用いられるほど強力な魔剣を持つものを騎士と呼ぶ。一人の騎士につき魔剣は一振りとされる。

・魔女の大傘

ウィッチ・スウィフト・アンブレラ。アド・エデムが幽閉されていた牢獄。呼称の由来は開いた傘を逆さにしたような足場に創られているため。

大断層の只中に建てられた城。城のカタチをした牢獄で、数多の城壁と幾重もの扉、千の鎖で玉座に座るモノを縛り付ける。城壁から玉座に向けてそれこそ蜘蛛の巣のように鎖が伸びており、玉座から立ち上がるには城の全てを破壊するだけの力が必要とされる。その他、玉座まで辿り着くためには七十八の扉があり、これも並の騎

士では打ち壊せない『魔法の扉』であるらしい。

・リアル・オブ・ザ・ワールド
真世界。タイプ・ムーンが持つ魔剣の名称。

・六人姉妹「No.1 saving system to earth」

大戦のおり、亜麗百種の盟主として君臨したモノ。

外見は人間種そのもので、六人全員が黒い帽子と箒に乗った童話の魔女のような姿をしていたという。一人一人が亜麗百種すべてを凌駕する能力を持っていた。鋼の大地において魔術は失われているが、六人姉妹はそれぞれ本当の魔法使いであつたらしい。

大戦末期、末妹の『審判』は騎士によって倒されたが、その断末魔によって大陸の中心に断層を作ってしまった。残る五人の行方は不明。

000メートル ぶろろーぐ(前書き)

はじめまして、注ぎグチと申します。

新参者ですが、温かい目で見守っていただけると幸いです。

000メートル ぷろろーぐ

くぷろろーぐ

ガコツガコツガコツ

テレッテゝ テレテテレレテゝ

「ふーっ」プファー（　　）y・

・
・
・

・

・

あ、どうもこんにちは

え、今何やってるかって？わかんない？

・・・・パチンコだよ

イヤーねえ、久しぶりにエヴァ打ちたくなつてさ・・・

あ、エヴァじゃないよエヴァのほうね・・・前のエヴァのほうが評判いいけど俺はこっちのほうが好きなんだよね

アニメからの人はエヴァがいつて言う人が多くて、映画からの人はエヴァの方がいいっていうんだよね

かくいう俺は・・・アニメ：途中、漫画：途中、映画：序・破のみ

・・・

ごめんなさい、石投げんといて（泣）

まあ、そこは置いといて・・・

そんな感じでパチンコに来てんだけどよ、見てみ・・・上の回転数・・・

3671

「・・・ふーっ「プファー」」y・

笑っちまうだろwこの台0回転からやってんだぜw

「・・・うがぁーーーー！！！！！！」

あ、隣の知らないおっちゃんすみませんw

・わかるやつにはわかんと思うんだよ

300くらい回すとそろそろかな？って思うじゃない？ で、しばらくやって600までいってもう来るぞ！ってニュータイプるじゃん？ で、800逝っちゃて何が何でも当ててやるってなるじゃん？

・・・ハイそれです

それでこれだよw 300回転前からリーチすらかからん（泣）

消費タバコ数はもう5箱に達する

隣のおっちゃんからは無言で缶コーヒーとメロンパンもらったよw

・・・俺、帰ったらReWriteのTerrarium終わらせんだw
↑死亡フラグ

リーチ！

ガタッ（。゜D、）ンマッ！！！

リ、リーチだって！？ ふふえふえw369回転振りのリーチだ
ジュルリ

綾波背景

「・・・いやいや、これで15回外れてっから、いやいや、ないって落ち着けてお」『ズシャー!!』」

ロングヌス2本

思わず隣を見る

・・・隣のおっちゃんと目が合う　コクッ（ -c - - ）

寡黙なナイスおっちゃん

寡黙だが今はそれだけで十分だ！

「発進!!」

初号機が発進し、使徒と競り合う　　今だ！　ポチッ

A Tフィールド全開！

あ、もう来たなこれ

さあー、タバコに火を点けますか・・・プファー（（y・

チュウイーン！

「え〜〜〜！？」

は、はずれた！？ ばんなそかな！！ ↑混乱中

「畜生！チクショウ！ちくしょう！そんなこったろうと思ったよ！
」

ポンポン

おちゃんに肩を叩かれた・・・そっちを向くと俺の画面の方を指差
していた・・・

「！・・・まさか・・・そんな！」

俺の台の図柄がこう止まってたんだ・・・

？？？

暴走か!!!

そして俺の周りから光が消えた・・・

/

/

/

「・・・あれ？」

何処ここ？

そこは真つ暗な空間で俺の打っていたエヴァの台しかない
まるで、俺のパチンコスペースだけを抜きとった様な空間

「・・・え？暴走は？・・・俺の暴走は？」

その問いに答えるものはいなかった

代わりにパチンコの液晶からは砂嵐が聞こえてくる

ビー、ビー、ビー、ビー

「！っ」 ビクッ

あいたたあゝ、ビクンってなって首ビクンってなった！

突然パチンコからアラート音が聞こえてきた

それは聞きなれた音、今日だけでも40回は聞いた音だ・・・

液晶には『警報』と書かれていた

「な、なんぞ!？」

液晶は警報から切り替わって、これまた見慣れたような気がする顔が映し出された

「よう」

そこには・・・隣のおっちゃんがいた

「・・・なんでだよ」

「じつは私は神なんじゃよ。パチンコを3737回転させても当たらんお主を不憫に思ってた。特典付きで二次元の世界に転生させてやろうと思っただけだよ?」

「病院逝け」

「そ、即答！」

いくら、おっちゃんでもこれはない ああ、ないよ

メロンパンもらったときは涙でそうだったけど……

まあ、いい人だったけどさあ〜 チラッ

「いいも〜ん、どうせ喋るとアーパーですよ 神様の威厳なんて高2のときにドブに捨てたも〜ん」

いじけてるし……ってか神様に高2のときあったんかw

はあ〜〜

「わかったよ、神のおっちゃん。信じるから信じるから、転生が何だって？あれか、二次創作的なのか？」

「その通りじゃ！ちなみに行き先は決めれないが能力は好きなのを5つまで叶えるぞ。ほれ、エヴァ台のVコントローラー動かして好きな選べるぞい」

「なんか行くこと前提に話が進んでく……」

「いやかの？」

「私是一向に構わん!!!」

さて能力はどんなのがあるか見てみつか♪

『無限の剣製』 『王の財宝』 『魔力無限』 『時空間操作』 『属性全種類』 『不老不死』 『悪魔の実全部』 『幻想殺し』 『e t c . e t c . . .』

「あまりのヒドさに全オレが泣いたw」

なにこれ？俺に世界征服でもしろと？

そんなものに興味ありません。

俺が興味あるのは今日の晩御飯くらいです。

「どうじゃ、おぬしのために選りすぐりを集めたんだが・・・」

「めっちゃ多い、選りすぐりになってねえよ・・・ こんなの1つで十分だっちゆうに」

「む、しかしそれでは行く世界で生き残れんかも知れんぞ？」

「争いのない世界を所望する」

「だが断る」

なぜに!?

「そのほうがおもしろいじゃろが」

このくそ神め・・・

正直戦いたくないでござる。

もう、適当なのでいいか。

よし、どうすっかな・・・なんか良いのないかな、死神的な刀系・
・焼き鳥的な魔法系・・・海賊的な果实系・・・直訳で運命系は
ちよつと懂れるな・・・貴族的世界の魔法系・・・お話「スターラ
イト的な魔法系は魔王様になれるやつがあるw・・・スキマババア
系は・・・?

「なあゝおつちゃん、この『肩の力を抜く程度の能力』ってのはど
んな能力なの」

「それは、わしが東方スキルを真似て作った自信作じゃ。平たく言
えば『どのような状況においてもリラックスできる能力』というや
つじゃ。戦闘時でも冷静を保っていられるぞ。」

どんな状況でも・・・じゃあ、あれかお遊戯会で緊張しなくてすむ
のか?・・・テスト中に腹痛くなんないのか?・・・どこでもすぐ
寝られるのか?

「まあ、そういう感じじゃ」

・・・・・・・・・・・・・・・・めっちゃいいじゃん

上がり症の俺にとってはまさに棚から牡丹餅やんけ！

「んじゃこれとこれと・・・」

・肩の力を抜く程度有能力

・ムツゴ。ウ王国

・僕の顔をお食べ

・内定がもらえるZE！

我ながらなかなかのモノが選べた気がする。

「あとは・・・」

「ちよつ、待った！」

なんだよ。今選んでんだろ・・・

「そんなのでいいの！？ もっとチートなものいっぱいあるじゃん！？」

いや、内定か黄金律で迷っただけけどニートはやだからさあ

働き口に困らないって何気にすごくねえ？ たぶん、この中で最も恐ろしい能力だと思う・・・

「そんなんじゃない生き残れないよ？ もっと欲を出そうよ。自分に正直になっちゃいなよYOU！」

いや、正直一個でよかったんだけど、貰える物は必要以上に貰う性格なもんで・・・

「夕チ割る！？」

照れるぜ。あ！

「どうした？ これではいけないと気がついたか！？」

「尻尾ほしいな・・・」

「・・・・・・・・」

もういつそのこと人間以外に転生しないかな・・・

えーと、尻尾が着きそうな能力はっど・・・やっぱ龍的な玉の出
てくる野菜になる能力かな？ もうちょっとモフモフしたのがいい
んだが・・・

「・・・もうよい。最後のひとつくらいはわしが選んどくからの。
文句はいわせんぞ」

うえ~~~~い

まあ、なんでもいいけどもね。

「それではぼちぼち逝ってもらっぞ」

はいよ。

「それでは、また会おう」

そして俺は足元に開いた穴に落ちていった。

続きたい！

000メートル ぶろろーぐ(後書き)

読んでいただきありがとうございます。 注ぎグチです。

パチンコはやらない人にはわかりづらかったですねw すいません。

感想・意見・応援メッセージなどありましたらお便りください。

001メートル まさかのキンクリ（前書き）

こんにちは、またやって参りました注ぎグチです。
それでは楽しんでいってください。

001メートル まさかのキンクリ

なんやかんやで転生してから18年たった。

それを見上げて一言・・・

「今日も曇りか・・・」

この世界は海がない、緑もない。まるで荒れ果てた荒野のようだ。
実際その通りなのだが・・・。

臨終した星。死に絶えた惑星。生物の住めない世界。

鋼の大地

大陸はひび割れた荒野となり、灰色と白濁とした雲に覆われる空。
食物は育つことなく、大気はかつてのように動物に適したものでは
なくなった。

徹底した世紀末。

実を言うと私が転生した世界は『鋼の大地』だったのですよ。
俺自身はこの世界のことをある程度は知っているのだ。生前のオタク
だった頃にTYPE-MOONの設定やら、青本なんかを読んで
悦に浸っていたのはいい思い出・・・。

ちょwきもいいわないでくださいw

まあ〜ここがどんな世界かといいますと・・・

人類は地球の資源を使いきり、母なる大地は臨終し、生物は住めなくなってしまうのです。それでも人類の文明技術は星の死亡によっても、人類を生き続けることを可能にしてみましたとさ。迷惑もいいとこだよw 人類は卓越した技術を使い、滅亡する前の地球に生きていた生物をモチーフに『亜麗百種』とよばれる新たな霊長類を作り出した。

ここまでは、まあ〜がんばったねって話なんだが・・・ここからがミソでして・・・

ところが亜麗百種が人類に反旗をひるがえし、世界の覇権を巡る大戦が始まる。一人一人が亜麗百種全てを凌駕する能力を持つ『六人姉妹』率いる亜麗百種の前に成す術のない人類は次第に追いつめられていく。追いつめられた人類は、人間種という名の新人類。人間自体が進化したもので元の人間とは似て非なるものと『騎士』を生み出した。

惑星としての機能を失った後の地球に溢れ出した計測不可能な粒子

——ジン——。

凄まじいエネルギー効率を誇り、このジンを戦闘に使用できる亜麗や騎士の戦闘において旧時代の兵器は全て無価値になってしまったほど。

大戦は新人類・騎士VS亜麗百種の新たな形に発展していく。その甲斐あって、六人姉妹の末妹は騎士によって倒された。

しかし、ある日、謎の生命体が飛来し地球上の全ての生命体へと攻撃を開始する。人間・亜麗百種双方とも壊滅寸前の損害を被ったことで大戦は幕をおろし、地球の生命体は『アリストテレス』と呼ばれるようになった謎の生命体との戦いへと突入していくSFチックなお話です。

まあ、もっと簡単に言うと・・・

死した星の上で次なる霊長の座をかけて楽しく仲良く内ゲバしてたけど、お前たちどっちも死んじやいなさいよ、とばかりに謎の物体Xが宇宙からやってきた話です。

・・・こうまとめるとなんと救いのない話だことで。

それが新暦79年のことでした。

アリストテレスとは他天体より飛来した8体の生命体。その正体は太陽系8惑星一（冥王星を含む）それぞれの系統樹における最も優れた存在。天体それぞれシステムの頂点に位置する唯一最強の存在であることから、アルテミット・ワン（究極の一）とも呼ばれる。各アルテミット・ワンは、タイプ。。。。と呼称される。ただし、物語上では惑星から派遣された最強種ということは俺しか知られていないので、物語中ではアリストテレスの呼称のみが通用されている。

アルテミット・ワンはそれぞれ一体で星の全生命体を絶滅させる力を持つ。アルテミット・ワンは星の代弁者のため、自己意思が無い。後天的に知的生命体との接触によって、知能を得るアリストテレスもいた。外見は人型・十字架型・蜘蛛型など、形態はガス状・鉱物・植物など多岐に渡る。

『空の境界』 『月姫』 『Fate/stay night』などの
TYPE-MOON作品では、星は意思を持った生命体（ガイア仮
説）とされ、かつて地球が人間に殺される寸前、母たる星が死して
も生き残る人類に畏怖を覚えた地球が、地上の生命体を絶滅させて
欲しいという信号を各惑星に送ったため、それに応じた惑星それぞ
れから最強種が地球に派遣されたものと設定には書かれていた。

タイプ・プルート
タイプ・ネプチューン
タイプ・ウラヌス
タイプ・サターン
タイプ・ビーナス
タイプ・ジュピター
タイプ・マーズ
タイプ・マアキュリー

この8体だ。

タイプ・プルートは六人姉妹と相打ちで討伐された。新暦80年の
ことである。

で

今はどんな状況下といたしますと・・・

今回はこの中のタイプ・ジュピターと戦いに来たわけです・・・

タイプ・ジュピターは外見は黒い巨人で全長数十キロメートルに到達し、理論上無限大に大きくなるという。人々からは黒いアリストテレスと呼ばれている。形態は光子ガスの塊で、中心核に擬似太陽を持つ。もっとも地球上の生命体を抹殺したアリストテレスであり、西の大陸で地球生物たちに挑まれた総力戦においては無傷で（そもそも傷という概念がない）撃退している。その後、騎士“アド・エデム”の魔剣・斬撃皇帝に両断され消滅させられるも、その最期に擬似太陽を暴走させて西の大陸のすべてを焼き尽くされる。

確かこのせいで、旧人類最後の生き残り『銃神ゴドー』は家族をなくしてしまったんだっとな・・・
今は13才だったかな？

・・・いきたくねえ。

俺は今、15才だよ？何で戦場なんかに行かなアカンねん！

混成部隊の中1人頭を抱える俺に話しかけてくるやつがいた。

「あなた、いい加減あきらめなさいよ。仕方ないじゃない、あんな“ガス野郎”には全勢力投入したって勝てるかわかんないんだから・・・」

「・・・うるせえやい・・・俺はミカエラと違って強くないんじゃない」

いじいじ

彼女の名前はミカエラ・デイレイ。亜麗百種 No.20 天使。この混成部隊の中でも5本指に入るほどの実力だ。その外見はまさに天使そのもの。ブロンドの長い髪に碧色の瞳、二十歳くらいでナイスバディーのめっちゃ美人さんだ。しかし、その外見とは似合わず、破壊に長けた種族である。飛行能力はあるが、翼の有無に左右されない。両翼はジンを収束させるためのもので、攻撃する手段である。その戦闘能力は、かつて六人姉妹の守護役だったほどで、一体で核ミサイル並。

そんな歩く核弾頭がいじいじしてる俺にいう。

「あんたも一応は騎士なんだからしゃきつとしなっさい。騎士だって私たち天使と渡り合えるんだから・・・」

そうなのだ、人間種の誕生時、ジンを多く身体に含んで誕生した赤子は体外にもう一つの器官をもち、成人するとジンを物質化する。その物質化されたものを『魔剣』と呼び、魔剣は様々な現象を引き起こす。その魔剣が実戦使用に耐えうるほど強力なもののみを、騎士という。現在では78人登録されている。戦闘能力は亜麗百種20位「天使」と同格とされるため、一般的な騎士の戦闘能力は、アリストテレスや六人姉妹よりは落ちると考えられている。

「・・・俺をお前と同格に扱うな」

そう、俺も一応は歩く核弾頭に分類されますのです（泣）

「昔のあんたはもつと尖ってたんだけど・・・」

「ちょw昔のことはやめて若気の至りだから／＼」

こいつとは大戦時代の初めての実践で敵同士として出会ったのだ。あの頃は12歳くらいだったかな？初めての戦場でテンション上がりまくり、相手側ボロボロにしてみましたのはいい思い出かな。本部に帰った後でめっさ吐いたけどw・・・それ以降は自重したんだよね

「あんたの魔剣ってそれだけ？」

ミカエラが俺のもつ物を指差す。

それは植物の種のようなもの・・・魔剣の待機状態である「剣種」

神のおっちゃんからもらった能力と騎士としての能力が合わさった結果生まれた魔剣・・・

「あゝもう少し使い勝手が良かったらなあ」

「あんなたは後方支援部隊の護衛でしょ？だったら死なないかもしれないわよ？」

「いや、そんなこと悩んでんじゃないんだよ。もっとこう・・・どうすれば変わるかとか・・・」

「悩んでもしょうがないわよ。できることをやんなさい。これが終わったら酒おごってあげるから」

そうだな、まあ、最終的にはそういうことだな。

ちよつとは気も楽になった。この原作知識があてにならん世界で18年もやってこれたんだからなるようになるか・・・

み、見る！

敵、肉眼で確認！

各部隊持ち場に着け！！

「・・・いよいよみたいね」

「ああそつだ・・・ミカエラ」

「なに？」

「最後に胸を揉ませてください」m(――)m

「死ね！！」()()(;)(≡)()(・ ・ ・
・「プギユツ！？」

顔面3回転半を決めて着地。

おお、顔面が摩り下ろし大根！

「あんたはどうしていつもそうなの！？／＼／ 今日珍しくシリアスだから変だとは思ってたけどこんなときなのよ！？もっと気の利いたこと言えんのかああ~~~~~＃！！！」

「あ、ちょwだ、だめ、そこは・らめえ~~~~！」

なおも続くダウン追撃。見る周りが引いてるw

「…………グスツ……死んじやうかもしれないのよ？ ……
ヒック……もう会えないのかもしれない……………」

「……………」

「…………だから私………」

…………

そろそろ行かなきゃやばいな……

こんな彼女をほっとけもしない、俺は鈍感ではない。自意識過剰でなければ彼女は俺のことが好きなのだろう。

「そこ！早く持ち場に着け！！」

隊長さんからのお達しだ。

時間もないからさっさと行くか

「…………今度酒おごってもらうからな」

「え？……………」

「酒だよ酒。お前が言ったんだろ？とびっきりのうまい酒ご馳走してもらうからな」

「う、うん／＼／」

もう間近に迫った黒い巨人。すでに先行部隊が攻撃を仕掛けている。

巨人はまるでうるさいハエを払うかのごとく味方を殺していく。

覚悟は決まった。

「またなミカエラ・ディレイ」

「ええ、またねアド・エデム」

そして俺は自分の持ち場とは真逆の方向へと走り出す。

黒い巨人のいる方へ

/

〈黒い巨人のアリストテレス討伐 報告書〉

・被害報告・

討伐混成部隊 総勢 300人

死亡 騎士 78名の内6名

亜麗 222名の内15名

負傷者 多数

黒い巨人は本部所属の騎士アド・エデムによって討伐された。
有する魔剣は対象の大きさに合わせて大地を喰らい刀身を増大させる『斬撃皇帝』。

亜麗百種と人類との大戦では目立った存在ではなかったが、アリストテレスとの戦いにおいて数十キロの巨体を持つ黒いアリストテレスを斬撃皇帝の一撃で両断・消滅させた。

今回のアリストテレスは黒い巨人で全長数十キロメートルに到達し、理論上無限大に大きくなるという。人々からは黒いアリストテレスと呼ばれている。形態は光子ガスの塊で、中心核に擬似太陽を持つ。もつとも地球上の生命体を抹殺したアリストテレスであり、騎士アド・エデムの魔剣・斬撃皇帝に両断され消滅させられるも、その最期に擬似太陽を暴走させて西の大陸のすべてを焼き尽くした。

・騎士 アド・エデムの処遇について・

彼の逸脱した魔剣の性能はこれからのアリストテレスとの戦いになくってはならないものと判断。
よって彼の身柄を保護し、大断層にある魔女の大傘に幽閉することとなった。

新暦81年 報告書

続けたい！

001メートル まさかのキンクリ（後書き）

あゝやっちゃった感満載の最新話でした。

書いてからの後悔（泣）

そんな小説でも100人くらい見ていてつくれました！

感謝です！これからもがんばりますのでご声援よろしくお願いします。
す。

002メール 幽閉そして断食w（前書き）

こんにちは注ぎグチです。

なんかめっちゃ勢いで書いてます。

そんな駄文でもよろしければ、どうぞ楽しんでみてください。

感想も待ってます。

002メートル 幽閉そして断食w

閉ざされた城の中

凍えるような寒さ

「まあ俺にはあんま意味ないけどもさ」

俺の能力『肩の力を抜く程度の能力』はリラックスできる快適な事象を作り出す能力。どんな極寒の地であつたとしても俺の周りは快適な温度で保たれている。どんな悪環境でも爆睡できるとんでも能力である。

「今日で何日たつたかな？」

俺ことアド・エデムは現在堂々の幽閉の身となつたおります、はい……

この世界に来たときはバイオカプセルの中だつた。カプセルから出てつけられてる名前にびっくり！つても懐かしい記憶です。

黒いアリストテレスとの戦闘から魔女の大傘つてところに隔離されてすごしています。ていうかこの連中まじパナイw飯が一回も出てこないwあれからどれくらい経つたかわからんが1年や2年の話じゃないから、俺じゃなかったら死んでますからw

俺は能力で強制断食も余裕でしたありがとうございますwチート

能力万歳w

あれだよ。閉じ込めた後に、これ外から干渉できなくねえ？的なことになっただよ絶対。

え？今の俺の格好？

月姫のアルクエイド・ブリュンスタッドみたいに王座に鎖で繋がれてる感じです。ちなみに全裸w

なんか食いたいな

結局がんばったが、西の大陸は焼き尽くされてしまった。

覚悟していたものの、やっぱり辛いものがあるな・・・

此処に入れられたのも被害者からの恨み言が俺に向かないようにするってのもある。だからこんな飯も出ないとこにおとなしく幽閉されたわけです。

正直、出ようと思えばいつでも出れます。でも、原作でもアド・エデムは此処から出ようとはしないみたいですから、呼ばれるまで全裸待機してますw

あまりにも暇だから自分のスキルでも確認しようかな？

いまさら？・・・ほっとけw

名前：アド・エデム 20歳

スキル：

「肩の力を抜く程度の能力」

自身または環境がリラックスすることができるようにする。すなわちそれは事象を最適なモノに書き換えること。

「ムツゴ。ウ王国」

名前の通りの能力。の自分以外の種族の高感度が高い。

「魔剣・斬撃皇帝」

対象の大きさに合わせて刀身を増大させるだけの単純な魔剣だったが、「肩の力を抜く程度の能力」によって変質。

F a t e 基準のスキル表

筋力	E X
魔力	A + +
耐久	E X
幸運	E
敏捷	A +
宝具	E X

なんやかんやいってチートですねw

騎士は核弾頭並みの天使とタメ張れる存在ですから、自身も歩く核弾頭のようなものですよ。ちなみにF a t eのサーバントは戦闘機くらいの戦力です。これだけでもとんでもない体です。

でも、幸運の低さは異様w

俺ではゲイ・ボルクは回避できそうにありません（汗）

そんなことも霞んで見えてしまうのが「肩の力も抜く程度の能力」ですね。この能力は先に言ったことは一部に過ぎません。リラックスとは完全に自分自身の空間を作ることです。それは完全な自己中心的なもので異物を一切認めないことです。俺、これに似たような能力知ってたよね……。その能力は「あらゆる干渉を否定し我を通す程度の能力」。はい、鬼巫女です。ありがとうございましたw

まさかねw そんなチートもうチートじゃねえしw おっちゃんも自重してんだろw……。たぶん

/

キングクリムゾン！

「騎士アド・エデム殿！ 貴殿に出頭命令が出されています。今から3日後に行われるアリストテレスの討伐に参加せよとのことですよ！」

「あゝ？」

目を覚ますと目の前に若い男がいた。

格好から察するに新米騎士なのだろう。

ナンだやつと出れんのか？

ん？いま何年だ？良くわからん。

「・・・おい」

「ひつ、な・ナンでしょう？」

え？なんでそんなビビってんの？わけワカメ。

俺ほど人畜無害さんはいないよ？

「いやそんな硬くなんなって、今何年か聞こうとしたただけだから」

「い、いえ！我々騎士にとってアド・エデム殿は伝説であります！
そのような方に無礼があつては・・・」

なにそれこわい・・・

俺そんなことになってんの？知らん買ったわwつか今何年か教え
ろ・・・

「今は新暦88年です」

・・・

7年！？7年もお城にいたのか・・・

「んじゃ、さつさと行くかい？」

そして王座から立とうとしたとき「ジャラッ」体中に巻きつけた鎖
が音を立てる。

腕に巻き付いた鎖を軽く引っ張ってみる。

ジャラッギシギシッ

「…………ふむ」

「あ、ただいま封印のほうを解除するための準備をしております。
しばらくお待ちを」

「あ、いらんいらん。ちょっと後ろに下がってな」

そういつてから、全身に巻きついた鎖を引っ張る。

「ふん！」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴオオオ……………ガゴッドガンツバ
ツギヤンツ！！

城を半壊させながら何とか鎖を千切ることに成功した。

「……………」

新米騎士のアホ面に少し笑えたw

「さて、案内を頼む」

「は、はい！こちらです」

久しぶりの外だ。あいつは怒ってかね？

/

/

/

「ん~~~~っは。久しぶりのシャバの空気はうまいぜ！」

「しゃば？」

「あ、いいのいいの。気にしないでね」

あそこから出たらず言って見たかったんだよねw

「でも、こんないつの間にかきたんだろうね？」

「今から5年前に鳥型のアリストテレスを倒しまして、その亡骸の上に立てた町なんですよ。」

「……ふ〜ん」

オレが今いるのは「世界樹の街」。

町の中心は森になっており、その中心には巨大な2本の樹が絡み合うようにして伸びている。あれが世界樹だそうだ。

その実態は、ゴドーによって倒されたタイプ・ヴィーナスは休眠に入り、その間に人が勝手に町を作ったのだ。タイプ・ヴィーナスはすでに休眠から覚めることができるのだが……

「……やさしいな」

「はい？」

「なんでもないさ……」

人は誰しも変われる。それはアリストテレスだって同じなんだよ。

優しき異端の天使。投影された少女。金髪の女の子。

思考しない存在は人と触れ合ったことにより、言葉を得て感情をを持ち自ら考えるようになった。

ゴドーもあの少女も……俺がこんな世界ばぱつと救ってや

るよ・・・だから

「久しぶりね・・・」

聞き覚えのある澄んだ声

「久しぶりだな、ミカエラ」

再開の約束は果たされた。

場所は酒場

「いいのかこんなことしてて？作戦とかは？」

片手にジョッキを掲げながら彼女は答えた

「いいのよ。避難勧告出されてここは今日までの営業なんだから。それに奢る約束だしね」

そういつてジョッキを一気に煽る。

「まったく、これで今回の指揮官っていうんだから世も末だな」

俺も酒を煽る。

「世はとつくに末よ馬鹿」

「あ、確かにw」

するとミカエラは真剣な眼差しで見つめてきた。

「あんたは・・・変わんないわね」

「俺が変わるようなら世界もこの7年間でもっと変わってんだろっ
なあ」

お茶らけた感じで答える。

「違うわよ。・・・あんた、7年前のあの時と同じ目してる・・・
今度はどこ行く気よ」

「・・・」

・・・するどいな

「・・・何でそう思っの？」

「女の勘」

ちょw即答w

そう言われちゃっしょうがね

「ちょっと過去に言ってこようかと・・・」

「過去？」

首をかしげて聞いてくる。色っぱゲツフンゲツフン！

「そう、もうこの世界を生き返らせることはできない。だったら過去に行つてこの世界の滅びを食い止めてくる。俺にはその手段もある。それがオレが7年間考えて出した答えだ。」

この7年間ただ無作為に過ごして来たわけではない。俺なりに考えたことだった。

「そう……」

「えらい簡単に納得すんのな」

ちよつと意外だつた。7年前の恋を彼女は引きずらないようだった。7年ぶりに見た彼女の顔は友に向ける友愛だった。

「7年は私には大きすぎたってことよ。今はもっといい男を見つけ
てるわ」

「もしかして旧人類か？」

「!?なんでわかったの?」

なるほど、ミカエラがあのだ天使だったのか……

「顔に書いてある「嘘!」うそw」
 D、)・・。。・()()()(; D)(≡)()

ものすごい顔で顔面にパンチをもらった。

「うおおお、顔が！おっちゃんにもらったイケ面が！」

なんてことすんじゃない！おっちゃんに誤れ！

「ホントもう！あんたっていつ・までた・って・も・・・・」

顔を俯かせ搾り出すように聞こえてくる声。先ほどの力はなく、弱々しい女性の声。

「・・・すまん、俺はこんなだから・・・女一人守れない俺なんかじゃ世界は守れないかも知れない。でも、それでも俺は世界を救ってくるよ。・・・約束する。」

———だから、平和な世界で生きてくれ

/

/

/

「・・・本当によろしいんですね？」

「ああ、これは俺の望んだことだ」

荒野に1人立つ。全身に黒い甲冑を身に纏う。兜の首の隙間から腰まで伸びている薄いピンクがかった髪を邪魔にならないように1つに結ぶ。

「これより我々は残存するすべてのアリストテレスをポイントG・・・あなたのいるところに誘導します」

「ああ・・・頼むよ」

「・・・作戦開始します・・・御武運を」

ああ。

今日はいつになく雲が厚いようだ。空にはたくさんの天使が舞って知る。

雲の向こう側で何かがつこめいているようだ。

「・・・来たな」

魔剣を開眼させ、空を引き裂き、雲の網から出してやる。どうやら2匹いたようだ。

巨大な立方体のようなもの、帯状のものがたくさんは揺れている。

もうひとつは、見たこともない形。虫に似ているだろうか。

そいつらが一斉にこちらに降ってくる。

さあ、過去と未来を変えに行こう。

続くのか？

002メートル 幽閉そして断食w（後書き）

どうでしたでしょうか？

注ぎグチもなんか見失ってきました。

これからどうなるのでしょうか？

極力、原作には書かれていない部分を書いていきたいと思っています。
す。

これからも応援してください。

003メートル パンツ何色？（前書き）

おはこんにちこんばんは。 注ぎグチです。

今回は戦闘シーンです。 もつぼろぼろです（泣）

それと感想もいただきました！それは後書きで触れます。

それではどうぞ！

003メートル パンツ何色？

切り上げ、振り下ろす。

全長50メートルくらいの虫もときはその動作で両断される。

上と下に分かれたソレは緑色の体液を撒き散らせビクンビクンと
痙攣している。

「・・・キモッ」

想像してほしい・・・全長50メートルはあろうかという蠼螂とゲ
ジゲジを足した感じの虫を・・・

気持ち悪すぎる！ 鳥肌が収まらない！

ヒュッ スガガガアアッ

「ウオッ」

立方体みたいなのが帯上の触手で攻撃してくる。

バラッ

立方体・・・面倒だからこいつがタイプ・ウラヌスでいいや。先の
虫はタイプ・ネプチューンってことで！

ウラヌスが立方体の体をほどこいていき、全身が帯状になる。

「げっ」

先とは比べ物にならない億の鞭の猛襲。風ぐ、貫く、払うそれだけの攻撃は数によりその脅威を発揮する。

襲ってきた帯状の鞭を切り裂く。

ゾロツ

クッ！？

ガガガガガガッガガッギギギイッ！

斬った断面から鞭が増殖して襲い掛かる。

「こっの！ゼルエルみたいな野郎だな！」

斬っても斬っても減らない。魔剣で防ぐが反撃の隙がまったく見つけられない。

鞭はなおも増え続けている。

何回か掠り肉を持ってかれる。

「・・・かすっただけでこれっすか」

使徒なら核があるんだが・・・

重なり合う鞭の視界の中にキラリと光るものがある。真っ赤な赤い

無限に枝分れしていく。

巨大な巨大な白い樹。

それは世界の可能性。

世界の樹形図。

数多ある平行世界の中から今最も必要な可能性……ウラヌスを殺す可能性を……

一本の枝先に光が集まっていく。

明。

「
オフティミゼーション・フット
最適化、完了」

再び、鞭が襲い掛かってくる。

それを掻い潜りつつ斬撃皇帝を開眼させる。

周囲の大気中のジンを瞬時に消費する。

それだけでは足りない。

能力によって周りの大地が光だし、ジンへと変換していく。

千の刀身があふれ出す。

その様子は正に巨大な樹といった感じた。

「数には数。ってかw」

単純ゆえに最強。

横一文字に切り裂く。

空を覆いつくした帯状の鞭は核とともに切り刻まれる。今度は再生しない。

そして地に落ちる。

痙攣していたネプチューンも一緒に切り刻まれていた。

「まさか、こんなあつさりいくなんてな」

・・・いや、心のどこかで自分の能力の本質を理解していたんだ。

できるってわかってやったことなんだ。できないはずがない。

ギチッ

「——っ！」

魔剣の侵食がだいぶ進んでるな。

肘までだったのが肩まで来てやがる。

「コイツだけでなく、俺まで最適化されてるってことなのかな・・・」

ザッザーー

「・・・おうと・・・エ・・・！・・・エデム！応答しろ！！」

通信機からミカエラの声がする。

「あいあい、聞こえるよ。今日のパンツは何色？」

「ふざけてる場合！？そちらの状況は？」

ちっ、ソレくらい答えてくれてもいいじゃん。ブーブー

「・・・おい、状況を報告しろ・・・」

イエス、ママ！！

「虫と帯は片付けた。後三体だな・・・十字架の奴は今どこら辺だ？」

「ポイントDに向かっている・・・天の亡骸だ」

野郎・・・俺には興味なしってかw

早速移動するか。

「そいつはツレないことで、挨拶にいかねえとなw UFO蜘蛛のほうはどうだ？」

景色が矢の如く後方へ飛んでいく。

「蜘蛛は同エリアに集めていた赤いアリストテレスを捕食した」

ズシャーーーーー！！

こけた。顔面から。そりゃーもう、派手に。

「はあ？」

「捕食したんだ。その後ポイントDに周囲を水晶化させながら進行中だ」

捕食って・・・さすがはドジッ娘属性なだけはある。ORTさんパナイっすw

「了解。全部隊を待避させろ」

「！っしかしっ！？」

到着した。辺りを見回す。

ゴドーは死なせはしないさ。少女も。

「俺1人でいい。邪魔だ・・・」

そこで通信を切る。

何か叫んでいたが時間がない。

今日の前にでつけスペーススパイダーことORTさんがいるんだから・・・

/

「よう、O R Tさんや・・・」

目の前には全長40メートルを超える蜘蛛がいる。

全身から緑色の炎を吹き出している。その炎に焼かれたものはすべてが水晶になってしまふ。

また、こいつは存在するだけでさながら「固有結界」の如く周辺環境を改竄し、O R Tが済んでいた環境へと改変させる特殊能力「水晶渓谷」を持つ。

俺の周囲はすでに渓谷と化している。

それはあまりに綺麗で目を奪われる。

「実を言つとさ、俺はあんたのファンだったんだよ・・・こんな形でご対面するなんてな」

目の前のO R Tはじつと俺のことを見ている。巨体に似合わない小さな目。人と大して変わらない。

「俺とあんたの能力は似てんだよ。自分の住んだ環境のように侵食するあんた。自分の適した環境に書き換える俺。・・・そっくり

だ
└[illegible]

ORTが吼え、襲い掛かってくる。

足で踏み潰そうとしてくる。

余波の炎を魔剣で防ぐが、水晶になって砕けてしまった。

「ちよっ！まじか！？」

最適化

結晶化しないように能力をかける。

ズキッ

肩の辺りに痛みが走るが気にせず続行する。

魔剣は相変わらずのでかさだが、結晶化することはなくなった。

なおも続く猛攻。

つく！足場が悪い。

地面が蜘蛛の巣状の渓谷になり弾性を帯びている。

まるでゴムの綱で綱渡りしているみたいだ。

すると足元の溪谷から水晶の槍が襲い掛かってくる。

「っ！」

左腕を貫かれる。

焼けるような熱だ。

「っがあああああ！！！」

刺さった矢から腕が結晶化されていく。

侵食！・・・気づいたときには体が勝手に動いていた。

ザン！

「はあっはあっ・・・」

躊躇なく左腕を切り落とす。

危ない。少しでも躊躇すれば全身を侵食されていた。

GUOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOO！！！！

「っ！」

今度は口からも水晶の槍を飛ばしてくる。

それを地面の弾性を利用して空に逃げて回避する。

そこにすかさずORTの前足が命を刈り取りに来る。

それにあわせるようにして剣を振り下ろす。

ズシャッ!!

鈍い音が響き渡る。

「ゲバッ!!」

前足は切り落としたが、もう片方の前足がガラ空きの左脇をモロにぶつ叩いた。

意識が飛びそうになる。吹っ飛ばされるが剣を溪谷の壁に突き立てとまる。

「——もつと速く、もつと俊敏に」

——おれ自身の体を最適化する。

弾丸の如く飛び出す。

刀身を枝分れさせ、切り刻む。

浅い……

全身細切れにするつもりが、左側の足3本しか刻めなかった。

GYAAAAAA!!!

「うつせえっすよ。っさっさと来い。」

今までにない高揚感に闘争本能が高ぶってくる。

それはORTも同じでその瞳はどこかうれしそうだった。

GUGYAAAAAA
A!!!!

目前に迫る口らしき部分。

緑の炎を噴き出す。

視界を遮る水晶の炎を切り払う!

「いない!?!」

すると足元の渓谷からORTが襲い掛かってくる。

「つにやろ!」

相手の勢いを利用して刀身を1つにまとめた斬撃皇帝を奥深く突き刺し、

「ぶちまける!」

1本から千本の刀身へ枝分する。

GYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!

あまりの苦痛にORTは叫び声を上げる。

ヒュッ

空気を切る音に反応して飛びのくと、俺がいた空間を残った前足が通過していく。

アリストテレスは既存の生命の常識が通用しない。このくらいではまだ死なない。

———
もっと強く、もっと上へ……

———
最適化

「お互いにそろそろ終いにしようや」

GUGUGYAAAAAAAAAAAAAAAA!!!

おまえも楽しんでくれてるのか？

駆け出す。

避けて切る。

避けられて叩く。

避けて振るう。

避けて放つ。

一進一退の攻防。

のしかかって来た胴体を蹴り飛ばす。

生まれた隙にすかさず振り下ろす。

——そのとき、光が降り注いだ。

ラ

「あ・あ・あれ」

何がどうなって？

[illegible]

!!!

ORTと戦ってて……そんで

うつ伏せだった体を転がし仰向けになる。

すると空はいつもの曇り空ではなく、白い十字架によって遮られていた。

タイプ・サターン。

全長三千メートル以上の十字架のような姿のアリストテレスで、十字架、空中要塞などと呼ばれる。空中に浮かぶアリストテレスのリーダー格。各星からの命令を受信し、各アリストテレスに伝える役目を担っていた。地上を攻撃する際は、爆散あるいは地中に穿孔し地震を起こすなどの効果がある十字型の光を雨のように降らして生命体や地表を破壊する。

/

/

〕 O R T 〕

O R Tは生まれてはじめて高揚感に満たされていた。

水星の頂点に君臨する生命——O R T——。

敵はいない。自分は単体^{ひとり}だった。

同じアリストテレスである。マーズですら捕食の対象でしかなかった。

そんなORTがはじめて傷を付けられたのが、自分自身より遥かに小さい生命だった。

吹けば、消えてしまいそうな。灯火はどんな攻撃にも耐えて見せた。

单体であつた自分と同格の存在。

恐怖とともに喜びがあつた。

ずっと戦っていたい。このものが自分を単体ひとりではなくす。そんな気持ちになった。

しかし

そな至高な時間を邪魔したものがいた。

そのものにより、灯火は消えかけていた。

こんな終わりであっていいはずがない！

此処で終わらせない！

自分の存在を小さく小さく纏め上げていく。

侵食

灯火の中へ薪をくべるかのごとく、中へと入る。

そこには真つ暗な空間と宙に浮く巨木があった。

その空間を侵食する。

すると真つ暗だった空間は水晶と緑の炎へと変わっていく。

そこには変わらず巨木が浮き続ける。

枯れることなく、悠然と。

この異空間を最適な状態へと書き換えていく。

侵食を受け入れ、自身をその環境に適したものへと作り変える。

..... ああ、これでいい.....これで自分は単体ではない。
ちひ

続け

003メートル パンツ何色？（後書き）

どうだったでしょうか。まさかのO R T融合！

実は注ぎグチはO R Tが大好きなんです！TYPE・MOONのキヤラクターマテリアルに乗ってるのを見てほれ込みました。

感想をいただきますた！

メジナ様、ターボー様ありがとうございます。こんな駄文ですが、完走を目指して生きたいと思っています。応援よろしくお願いします。

次回の「此ノ樹の110メートル」をよろしく願います。

004メートル 此ノ樹（前書き）

いよいよ、鋼の大地編完結です。

それではどうぞ。

004メートル 此ノ樹

それは生命の記憶。

ここではないどこか、遠くの星の記憶。

それはヒトリで、いつもヒトリでいた。

触れるものはすべて凍りつくように水晶へと変わっていく。

美しくも残酷な水晶溪谷。

その中でそれは悠然とたたずんでいる。

/

/

/

「う．．．あ．．．．．？」

意識が浮上する。

「つつ！」

痛む左目を“左手”で押さえる。

．．．．．なぜ左手が？

よく見ると全身の傷が癒えている。

「．．．．．なぜ？」

周りを見渡すとO R Tの炎結晶に囲まれている。

炎であり水晶のそれに自身の姿が映る。揺らめく鏡像が一瞬はつきりと浮かび上がる。

——左目が燃えている。

それはさながらブラックロックシューターのようであった。

「……ORTか？」

他を理解するはずのないORTが俺を助けた？

——。

「……そうかよ。んじゃ茶々と片付けてお前と遊ぶことにするよ」

——。

なんとなく自分の中にORTを感じる。

暖かい翡翠色の炎が俺を包んでいる。

ムツゴ。ウのおかげか？

俺の能力がO R Tの環境に変化をもたらしたのか？

ヴィーナスは人を見て人を学んだ。ゴドーとの会話で感情を芽生えさせていった。

それと同じように。

理解できないものを理解できるように。

戦いの中には言葉が要らないように、お互いを認め合った。

「物好きなやつだな・・・・・・・・・・」

自然と笑みが零れてくる。

ラーーーーー

十字架が天の亡骸の方へ向かっている。

剣種を強く握り締める。

「・・・・・・・・ここで止める」

剣種はたちまち右腕を飲み込み、右肩から突き出た不恰好な樹の枝が翼のように広がる。

斬撃皇帝を開眼させる。

その刀身は分厚い雲を裂き、幻影の赤い空をも切り裂く。

その向こうに広がる青い空。

・・・人間、やめてんなあゝ俺。

「あ、もともと人間じゃないかw」

さらにO R Tと融合した日には・・・・・・・・考えるのはよそう。

ラーーーーーー

空に響く審判の歌。

十字架から聞こえてくる。

炎結晶に意識を集中させ、一気に爆発させる。

天高くまで突き上げた炎が十字架を飲み込み、水晶の絶壁となる。
タイプ・サターンの動きをさえぎる。

ここは水晶溪谷。

俺たちの独壇場。

ラ—————

絡みつく水晶の鎖を壊そうと試みているが、壊したところからまた炎が吹きあがる。

魔剣・斬撃皇帝を振りかぶる。

偽りも真実もすべてを切り裂く。

王の前ではすべてが平等。

この瞬間に斬撃皇帝は完成された。

・・・思い上がんなよ十字架。

「まずはその幻想をぶった斬るってか？w」

そして振り下ろされた。

/

/

/

最後の仕上げだ。

。。

「……すまんが、少し付き合ってくれないか？」

。

サンキュー。

斬撃皇帝の侵食が全身に駆け巡る。

体のあちこちから樹の枝が突き出す。

それは止まることなく天へ伸びる。

それはすべての翼ある者の夢のように、朽ち果てることなく伸びていく。

いずれは灰色の雲海突き抜け、成層圏まで到達する。

色のない無色の大地。遠く見える海には色はない。

それは、完璧までに死んだ世界。

25年間、この景色をみてきた。

・・・それでも。

鋼色の世界は、それでも、尊すぎて視界を滲ませた。

白い巨樹へとなった俺。

星丸ごと1つを侵食した。

最適化、開始。

世界の構成分子を解析。

膨大容量、発見。

星の記憶。

解析、完了。

星を最適化。

/

/

|

/

古い書物に描かれている物語。

星は死んだ。

二つの種が霊長の座を賭けて戦っていた。

しかし、空から8つの裁きが舞い降りた。

それは死した星でなお生き続ける者への裁き。

これは騎士の物語。

その者、黒き裁きを一太刀のもと、斬り伏せる。

天より来る裁きに挑み、これを斬り裂く。

騎士は樹となる。

命をなくした星を過去の姿に変えた。

樹は死んだ星の変わりに世界の運用を始めた。

その枝からは、新たな命が生まれ。

根元からは水が湧き出した。

やがて子らはその麓に町を立て、神と崇めた。

神木すべてのものに穏やかな安寧を与える。

祭事の際は地上より110メートルの所まで上る。

そこに小さな神殿が建てられている。

そこには体を樹の中に飲まれた水晶の青年の姿がある。

此ノ樹の110メートル

今もそこで子らの安寧を願いつけている。

その神木

アド・エデム
神の如し者

イレイ

新暦110年

著者： ミカエラ・デ

「うんうん」

/

/

/

なんか見覚えがあるな。

この真っ暗な空間。目の前にエヴァのパチンコ台がある。

そこから、声が聞こえる。

「まったくおぬしは無茶するな……」

「おっちゃん！？……え？あれ？何で？」

あれ、おれ、星を過去の姿にして、それで………

「はあ、……見事に世界は動き始めよったわ」

そうだ。思い出した。

……良かった。正直どうなるかわからなかった。

星全体に根を張り、そこから全体を斬撃皇帝を開眼させる要領で、ジンに物質変換を行った。

膨大なエネルギーと化した星から記憶を読み取り、それを従い環境を最適化した。

ここら辺から、記憶が曖昧になってくる。

自らを量子変換し、ただ単純なエネルギー体となった結果だ。

記憶に従い、星の運用をしていくようにしたと思う。

「そうか・・・」

顔を上げる。

「・・・なあ、おっちゃん。これでよかったのか？」

「お前はがんばった方じゃよ。たいていの転生者はすべてを救いたがる自分自身さえも・・・」

「俺もそうだよ」

自身の勝手に皆を巻き込み、かき乱した。

「確かにそうかもしれんが、おぬしは結果を出している。ほれ」

そういつて画面の中のおっちゃんは椅子に座る俺の後ろを指差す。

それを辿るように視線を後ろに向ける。

「?・・・・・・・・・・うおっ!!」

そこには翡翠色の髪と瞳をしており、神は足元まで伸ばし、頭に白いベレー帽を被り、白いワンピースを着たかわいらしい幼女。

小学生低学年くらいかな?かわいらしく俺の服の裾を握っている。
・・・グッジョブ!

はっロリコンちゃうよ!

「ORTじゃ」

・・・・・・・・

「は?」

「そいつはORTの投影じゃ。今はお主と存在座標ごと一体化しておるから一緒に此処に来た。おぬしがORTでORTがおぬしじゃ。その姿はあくまで幻影じゃ。タイプ・ヴィーナスと同じようなものと考えておくれ。多少はおぬしのイメージが反映されているがの・・・このロリコン」

「ロリコンちゃうよ!」

失礼な# 俺はただ小さい子を見守る紳士だ!

くいくい

「?・・・なんぞ?」

裾を引っ張られてのでO R Tのほうを向く。

「・・・ロリコン?」

O r z

「ねえねえロリコンって何?」

「・・・それは紳士の名さ」

「紳士って?」

「志を持つ同士さ」

「同士って?」

「・・・」

「?」

どうやらO R Tは見た目通りの少女のようだ。

「O R Tもおぬしに影響されている。これからの生活の中で学んでいくことが多い。まあ、妹ができたと思えばいいんじゃない?」

「軽いな、おい」

「さてと早速じゃが次に逝ってもらおうとするかの」

「なんか漢字ちがくない？つか、つぎって？」

「気のせいじゃ。おぬしは世界のシステムそのものじゃ。そのため輪廻の輪からはずした。お主はこれから様々な世界に行き。適当に過ごせばいい。」

まじか・・・・・・・・・・・・・・・・え？

「どういつこと？」

「どうもこうもない。いまやわしにおぬしは止められないからの・
・好きなだけ転生ライフを満喫すればいい」

「ふむわからん」

めっちゃ、どうでもいいがO R Tよ、俺の髪で遊ぶな。痛い。

ん？そういえば・・・・

「こいつも一緒に連れてっていいのか？」

「もちろんじゃ」

俺の髪にぶら下がる幼女に視線を移すと目が合う。

二カッ

屈託のない笑顔を向けてくる。

・・・いいけど、髪離せ！

「わかった。了承するよ。」

なんか楽しそうだし、気候な2人旅もいいかもな。

「おお！そうか。では今のおぬしの状況を説明しようかの。お主の魔剣・斬撃皇帝は完全におぬしの体を侵食した。これは体自体が剣種であるということ。・・・説明するよりも実践じゃ。試しにエクスカリバーを想像して開眼してみろ。」

ふむ。開眼。

「おお！」

今までは右腕と一体化していた魔剣が、士郎の投影のように出せる。それだけでなく、思い描く形通りに変化する。ただし、色は黒がデフォ。

今の状態はさながらセイバー・オルタの黒いエクスカリバー

「おぬし自身が魔剣となることで可能となったわけだ。」

なるほど・・・。

「次にORTだが、こいつはお主と同化しておるゆえにお主は「水晶渓谷」を使うことができる。使用の際は左目から翡翠色の炎結晶が吹き出る。」

ブラックロツ（ry

「Fate風のスキル表ではこんな感じだ」

Fate基準のスキル表

筋力	E	X
魔力		
耐久	E	X
幸運		
敏捷	E	X
宝具	E	X

「なにこれw 魔力と幸運さんがログアウトしてますよ？」

「魔力は魔剣の量子変換でどうにでもなる、幸運は樹形図から好きに選べるおぬしには関係ないからの・・・」

「もう、何もいうまい・・・」

んじゃ、そろそろ行くとするかね。

「達者で暮らせ。おぬしとの出会いは中々に愉快だったぞ」

「おう！またなおっちゃん」

O R T・・・オルトの手をとり、光のほうへ進んでいく。

どんな世界に行くのか楽しみだ。

続く

004メートル 此ノ樹（後書き）

本当にこんな終わりでいいのか？タイプ・ムーンもタイプ・アザーも出てこなかった。

注ぎグチの非才をどうか許してください。

さてさてお次はいいよ次の世界ですが、どこがいいですか？

予定ではR e w r i t e だったのですが、もう勢いだけで書いてますのでどうにでもなります。

ご希望の意見が多かった原作作品の世界にいかがかな・・・

ご意見・感想お待ちしております。

幕間1メートル 「キャラ設定」 注ぎグチの本気（前書き）

注ぎグチの本気をどうぞ堪能ください。

幕間1メートル 「キャラ設定」 注ぎグチの本気

どうも、注ぎグチです。

「エデムとORTの行く平行世界 第1弾」お楽しみいただいているでしょうか？

ここまでを読んでいたいた方々に多大な感謝とお礼を申し上げます。

ありがとうございます。これからも誠心誠意込めまして執筆に励みたいと思います。

また、これからは注ぎグチの私生活の都合上、更新が遅れることもあると思います。それでも完走を目指して行きたいと思っていますので、応援よろしく願います。

また、ご希望の原作をシリーズ作品として執筆したいと思っています。

注ぎグチはできるだけ読者の皆様のニーズにお答えし、皆様との作品を作っていきたいと思っています。

注ぎグチは手遅れなオタクです。アニメ、漫画、小説、エロゲー、一般ゲーム、どのような原作が来ようとも対応していけます。

ぜひとも皆さんの意見をお聞かせください。続編は多かった原作作品か、注ぎグチのノリで決めたいと思います。

選ばれなかった原作も続編または番外という形で取り上げていくことをお約束します。

現在のシリーズもので型月とKeyのRewriteを書いております。

たくさんのご意見・希望をお待ちしております。

さて、挨拶は此処までとして……

さてさて、そろそろキャラ設定の方を出さないと私の非才な文からは主人公たちの想像が難しいかと存じます。

そこで……んっなんと！

この私こと注ぎグチが本作の主人公「アド・エDEM」とヒロイン！？「ORT」さんの“イラスト！！”を本気を出して書いて参りました！！！！！！！！！！

ふふふつ 実は注ぎグチ・・・ある時は理系大学生・・・またある時は就職難民・・・またある時は「此ノ110」の作者・・・
・その正体は！！・・・コミケにも参加している「イラストレーター」
なのです！！

・・・

・・・あ、どうでもいいですよね（泣）

ご意見・感想もお待ちしております。

イラストについて一言くれるとうれしいです。

それではキャラクター紹介の方へどうぞ！

/

/

/

■ アド・エデム

> i 2 8 9 0 0 — 3 7 2 4 <

本作の主人公。髪は薄いピンク色をしている。瞳は青い。おっちゃんのおかげでイケメン。

身長176cm 体重65? 血液型不明。

趣味は睡眠、パチンコ。好きなものは博打、幼女、睡眠。嫌いなものはキノコ、生魚。

将来の夢はハーレム!「エデム?「ヒツ!?お落ち着けオルト!これは!」問答無用・バギゴギガギゴ「ギヤア~~~~!」

性格はのんびり屋。基本は平穩を目指して行動している。時たま邪気眼が発動する。眼帯など。後はロリコン疑惑がある。

身体能力は核弾頭並み。Fateのサーヴァントが戦闘機と例えられている。戦闘機は給油などが必要だけど、核弾頭は発射されればどうしようもない。

現在、「ORT」と「魔剣・斬撃皇帝」と一体化しています。自らが剣であるため「虚刀流でもはじめるか・」っと思っている今日この頃。

根源としてあるのは「世界の樹形図」。それが能力にも影響を与えている。

イラストのモデルは「IS インフィニット・ストラトス ラウラ」です。

・能力・スキル

筋力 EX

魔力 |

耐久	EX
幸運	—
敏捷	EX
宝具	EX

「魔剣・斬撃皇帝」

対象の大きさに合わせて刀身を増大させるだけの単純な魔剣。その本質はあらゆる可能性を内包した樹形図より対象を確実に斬り裂く因子を要素となる因子を持つてくること。

現在は体そのものが魔剣であるため、好きな形態、で好きなように出せるが黒色がデフォ。

現在、猛練習の末にセイバー・オルタの黒いエクスカリバーを完璧に模倣することができ、通常開眼のデフォとなっている。

「肩の力を抜く程度の能力」

おっちゃんにもらった能力。どんな所でもリラックスする（させる）ことができる。その本質は樹形図より最適な事象を選択・書き換えること。

普段は睡眠のため意外使っていない。子供をあやすときとかに便利。

「ムツゴ。ウ王国」

そのままの能力。自分以外の種族と心を通わせることができる。

「魔眼：侵食結界・水晶溪谷」

ORTが持っている能力。一体化したことにより使用可能になった。使用中は左目から炎結晶が噴き出してくるため、一応は魔眼という扱い。普段、眼帯をつけているのは「なんかカッコよくねえ？」とのこと。イラストにもその様子が描いてある。

■ オルト

> i 2 8 9 0 1 — 3 7 2 4 <

本作のヒロイン。髪は黄緑と青のメッシュ。瞳は翡翠色。頑張っ
て見て中学生くらいの幼いゲッフォンゲッフォン・・・少女。

身長 133 cm 体重 33? 3 サイズ 65 - 47 - 62 血液
型不明

モデルとなったのキャラに体格が似ている。ただし、それよりも
少しだけ身体的スペックが高いのが密かな自慢「なにか（笑）」・
・・・いえ、ごめんなさい。

その正体は死徒二十七祖の五位。水星のアルティミット・ワンで
あるが、5000年ほど先に地球に到着してしまったドジっ娘。
全長40メートルほどの宇宙生物。外見は巨大な蜘蛛に酷似する。

単純に実力でいえば現在世界最強。地球で戦う限り弱点は無いと
される。死の概念がないため直死の魔眼でも殺すことはできず、物
理的に破壊するしかない。

地上のいかなる材質よりも硬く、柔らかで、気温差に耐え、鋭い
という外皮に覆われている。

趣味はエデムといること。好きなものはエデム。嫌いなものはエ
デム以外

将来の夢はお嫁さん！

性格はモデルのキャラに似ているがツン2デレ8くらいの割合。という感じ。最近人間に触れてきて感情を見せるようになってきた。というか口がうまくなってきた。エデムの財布を「あら？あなたのような甲斐性なしに財布なんて持たせられないでしょ？私がしっかり管理してあげる♪」と言って紐を握っている。ヤンデレ

エデムが「始めて会った頃のオルトは見た目通りの子供だったのに……」と育て方を間違えたと嘆いていた。

最近は料理を勉強しているが、あまり進歩していない。しかし、エデムのお嫁さん「べ、別にそ、そんな／＼／＼……ブツブツ」になるため花嫁修業中。

現在はアド・エデムと融合したため、斬撃皇帝とも融合したことになる。

そのため、アド・エデムの根源の投影といっても粗食ない関係になっている。

普段はエデムの影の中で過ごしている。

エデムの許可によりORTへの変身も可能。

イラストのモデルは「MELTY BLOOD 白レン」です。

・能力・スキル

筋力	E X
魔力	
耐久	E X
幸運	B
敏捷	E X
宝具	A +

「侵食結界・水晶溪谷」

侵食固有結界—（固有結界に似た能力）『水晶溪谷』を数千年にわたり展開しているという。水晶溪谷は彼女が存在するだけでそこを彼女の住んでいた環境に変化させるというものであり、要するに異界秩序による地球の物理法則の改竄である。炎がふてた所はたちまち結晶化する。この炎を炎結晶という。

幕間1メートル 「キャラ設定」

注ぎグチの本気（後書き）

どうでしたか？

注ぎグチの画力は？皆様のイメージとは違っていたかもしれません。
今後も要望があるようなら、オルトちゃんの水着やサンタ姿など季節イベントごとにやって行きたいと思います。

ご意見・感想お待ちしております。

シリーズものへ変更のお知らせと謝罪

ここまでのご愛読、誠に感謝します。

このたび、「多数の世界を同じ作品に閉じ込めてしまつと原作を知らない人が嫌がつてしまう」つと友人から指摘を受け、このたびシリーズものとして分けさせていただくことになりました。

今までご愛読くださいました皆様には深くお詫び申し上げます。

これからも「此ノ樹の110メートル」改め・・・「エデムとORTが行く平行世界シリーズ第1弾 TYPE-MOON 編」として続けていくつもりです。

また、Rewrite 編は「エデムとORTの行く平行世界 第2弾」Rewrite 編」として別に投稿していくことになりました。

誠にお手数をお掛けする事を深くお詫び申し上げます。

すみませんでした。

これからも注ぎグチと「エデムとORTの行く平行世界」をよろしくお願い申し上げます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4884v/>

此ノ樹の110メートル～エデムとORTが行く平行世界シリーズ 第1弾～

2011年11月11日22時08分発行